技の肖像
Portrait of Skills

代表取締役社長　及川 洋さん

有限会社オイカワデニム

代表取締役社長 及川（おいかわ） 洋（ひろし） さん

海を見下ろす高台生まれ クオリティの高いデニム

気仙沼の青い海を見下ろす高台に有限会社オイカワデニムは工場を構える。

創業は1981年。創業したのは、現在代表を務める及川洋さんの父だったが、及川さんが子どものころに早逝し、その後は母が会社を引き継ぎ、残された及川さんを育て上げた。

小さい時からデニムに囲まれ、両親が働く姿を見ながら育った及川さんだったが、「若いころは服に興味はありませんでした」と笑う。「ただ、両親が一生懸命仕事している様子を見て、ちょっと工場でアルバイトしてみようかな、と。気楽な気持ちでスタートしました」。動機は単純だったが、実際に服作りをしてみると、すぐにのめりこんだ。「固くて重い生地が服になっていくのに、なんとも言えない満足感を覚えました」。素材や縫い方でさまざまな変化をみせるデニムの面白さにとりつかれ、役員を経て、2016年に代表取締役に就任した。「今も、社員と一緒に工場で縫製作業をしています。自分の履くジーンズは、毎年自分でつくっているんですよ」。

今でこそウェブサイトや店舗で多くのファンがいる「オイカワデニムブランド」だが、以前は、大手ブランドからの依頼で商品をつくる「OEM」が事業のほとんどを占めていた。「多くのブランドに信用していただき、今でもたくさんのお仕事をいただいています。決められた商品をつくるだけ、というよりも、一緒に新商品を開発し、縫製、納品までする、というやり方でお仕事することが多いですね。世界的なジーンズブランドの100年前のジーンズにどんな素材が使われていたのか、どんな縫製をしていたのかなどを研究して、復刻版をつくったこともありました」。

高い技術と提案力で実績を積み上げ続けてきたが、技術を持つ人材を定着させ、誇りを持って仕事してもらうためには「オリジナルブランド」が必要ではないかと考えるようになり、オリジナルでつくったジーンズを手に、海外に販路を見い出した。「メイドインジャパンは海外だとすごいブランド力なんです」。北欧を中心に取り扱い店舗を拡大し、一時は50店舗以上と取引があった。

メカジキの角を組み込んだ 気仙沼生まれの糸を開発

そんな時に起こったのが東日本大震災だった。気仙沼は大きな被害を受け、一時はオイカワデニムの工場も近所の方々の避難所として使われていた。「目の前で大きな被害を受けている人がたくさんいる状況で、とても製造できる環境ではありませんでした。海外のバイヤーさんや取引店舗の方は来られるようになったらいつでも来て、と言ってくれたのですが、すぐに再開できる状況ではなく…。そのうち避難所に来る地元の方と話したり、沿岸部をめぐったりするうちに、命や価値、地元で生きるということは、どういうことなんだろうと真剣に考えるようになったんです。東北や気仙沼の技術や素材を活用して、地域に還元する方法があるんじゃないかな、と」。

そんなとき出会ったのが「メカジキの角」だった。メカジキは大きな角を持った魚だ。通常は捨てられてしまう角の部分を、ジーンズの素材にできないかと考えた。「糸や布を扱う会社さんに、魚の一部分を糸に組み込めないかという突拍子もない依頼をしたので、最初は『及川は震災でどうにかなってしまった』、と思われていたようです」と及川さんは笑う。だが、熱心な想いが通じ、角を砕いた粉を糸に組み込む技術は2年の年月をかけて完成。2014年には、商品として販売を始めることができるようになった。メカジキの角を使ったデニムは、マスコミなどにも大きく取り上げられ、一般のジーンズファンはもちろん、地元の漁師さんや海外の漁業関係者にも愛されている。

「挑戦して失敗し、また挑戦する姿を見せることは、次世代の力になるかなと思っています。これからも地元の素材を活用し、新しい素材や商品を開発していく予定です。企画も素材も縫製もメイドインジャパンの商品を、気仙沼から発信していきたいと思っています」。

お問い合わせ

有限会社オイカワデニム

所在地 気仙沼市本吉町蔵内83-1

TEL 0226-42-3911

URL http://www.zerodenim.com